
永遠の刻、泡沫の夢

遠間保雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の刻、泡沫の夢

【Nコード】

N9249B

【作者名】

遠間保雄

【あらすじ】

孤独な少年波江信司は、ある日不思議な男と出会う。成り行きからその男を泊めることになった信司だが、男は自分のことを久遠と名乗り、永遠に生きる者だという。

第一話（前書き）

なんとなくで書いてみたものです。
つたないところも多々ありますが、読んで下さったら幸いです。

第一話

この世は泡沫。それはまるで波間に浮かぶ泡の如く…
一片の夢、虚ろなる絵物語
全ては移り変わ消えていく。
それはまるで流れゆく水の如く…
これは、そんな流れから取り残された者が見た、ほんの少しばかり
の夢物語…

第一部 夕陽の中で

学校の帰り道、川に沿った堤防を歩いて行く。
俺はこの景色が結構好きだった。
地平線に落ちていく夕日に照らされ、全てが橙色に染まっていく。
自分も、川辺も、空も、建物も…
それら全てが同じ色に染められていく。
そんな景色を見ると、自分も世界の一部なのだと実感できる。
一人ではないのだと。ここにいていいのだと。
そう思えてくる。
しかし…

「もう、日が落ちるな…」

日が落ちれば夜が来る。

俺は夜が嫌いだった。

夜の闇はすべてを包む。

それは一見今の景色のようだが全然違う。

夕陽の色は優しい。

夜の闇は怖い。

闇は黒い。

それはまるで全てを飲み込もうとしているかのように。

自分という存在が消されていくようで…
だから夜は嫌いだっただ。

「……………」
そんなことをぼんやり考えながら歩いていると…

「いい景色ですね」

いきなり声をかけられた。

慌てて声の主を探す。

すると、草に埋もれるようにして、一人の男が寝そべっていた。

ぼろぼろの布を纏った男は、こちらも見ずに再び声をかけてきた。

「こんばんは。いや、まだこんにちはかな？」

男はそう言つと聞こえないぐらいの声で、ぶつぶつと何かを呟き始めた。

どう考えても怪しかったが、俺は何故かその男に懐かしさを感じていた。

だからだろうか、気がつく俺も男に声をかけていた。

「今の時間じゃまだこんにちはじゃないか？」

「そうですね？」

「多分な」

そう言つと男はなるほどといった顔をした。

「こんな所で何やってんだ？」

「ええ、まあ…。実はふらつと来たもんで泊まるところがなくってですね。お金の持ち合わせもあんまりなくって。どうしようかなと考えていたら、夕日がやけに綺麗だったもんで、ここに寝っ転がって眺めていたんですよ。」

「泊まるところがないって、あんたどこから来たんだ？」

「さあ、どこからでしょう？」

「は？自分がどこから来たのかも分かんないのか？」

「いやあ、私はずっと旅をしていますがね。どこから旅を始めたかなんて、自分でも分からないんですよ。」

「何だそりゃ。」

そう言いながら、俺は男の隣に腰を下ろした。

男は特に気にかけるでもなく、相変わらず夕日に染まる川辺を見下ろしていた。

「赤いですね。」

いきなり男が口を開いた。

「赤いな。」

なんとなくそんな言葉が口をついた。

「真っ赤ですね。」

訳のわからないやりとり。

しかし、不思議と窮屈さは感じなかった。

そして再び沈黙。

聞こえてくるのは季節の終わりを告げる蝉の声と、季節の訪れを告げる鈴虫の声。

どのくらい経っただろう。夕日が半分ほど沈み、東の空が陰り始めた頃。

「よかつたら家に泊まるか？」

何故だか俺はそう呟いていた。

男はびつくりした様子もなく、

「いいんですか？」

と聞き返してきた。

「ああ。」

俺はすぐに答えた。

「それならお言葉に甘えますか。」

そついうと男は立ち上がり、こちらに向かって右手を差し出した。

俺はその手を受け取り立ち上がる。

「そついえば、まだ名前も聞いてませんでしたね。」

男が苦笑しながらそつ言う。

つられて俺も笑ってしまった。

確かにおかしな話だ。

名前も知らない怪しい男を、何となくで家に止めようとしている。

でも…

何故だかそれでいいような気がしたのだ。
きっとこれはただの気まぐれ。

夕日が綺麗だったから。

夜が怖かったから。

そんなことを考えていたから。

だからなんとなく思ってしまったのだ。

一人じゃない方がいいと…。

「じゃあ、自己紹介といくか。」

「そうですね」

眩いほどの夕日が照らす中。

「波江信司だ。」

「久遠です。よろしく。」

こうして俺は不思議な男と出会ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9249b/>

永遠の刻、泡沫の夢

2010年11月17日04時11分発行